

発達障害児の父親役割

—父親の障害のある子どもとの関係性構築—

○ 佛教大学 練田修司 (10492)

キーワード：父親、発達障害児、関係性

1. 研究目的

忘れてならないのは ASD 児の特性はなくならないのである。その生きづらさが、軽減される希望や期待はある。一方で、ASD の子どもと共に生活している家族は、日常として ASD 特性と向き合っている。家族は「なくならない ASD 特性」を受け入れ、時に受け入れられない経験を繰り返し続けている。そこには、個々の生活者として父親、母親、きょうだいなどがいる。この生活者たちを、これまで障害者を通してだけで考えてはいないだろうか。この家族は、どれだけ子どものことを知っても、わからないことは尽きない。そして、母親の家族ケア偏重は大きな課題であるが、障害者家族ではむしろ強化されていないか。その大きな資源である父親の理解を進め、役割は再評価されなければならない。

本研究は、父親が障害特性のある子どもとの関係性を、どのように育みながら生きてきたかを明らかにすることを目的とする。この父親の状態や変化を知ることは、父親支援だけでなく、障害特性を持つ子どもや母親支援にもつながると期待できる。

2. 研究の視点および方法

本研究は、発達障害児の父親 3 名に、障害特性のある子どもをどのように受け止めて理解し、関係を構築したかを明らかにするため、半構造化インタビュー調査による質的研究を実施した。調査期間は 2024 年 7 月から 9 月で、インタビューは、一人当たり 60 分から 90 分であった。録音をもとに逐語録を作成し、M-GTA 法を用いて分析を行った。調査時、父親の平均年齢は 52 歳で、中年期であった。養育療育した子どもの平均年齢は 20 歳で、知的障害がある子どもを含み、青年期後期であった。

筆者は 31 歳発達障害児の次女を持つ父親であり、それを開示した当事者研究である。

3. 倫理的配慮

本調査は、日本社会福祉学会研究倫理規定を遵守し、「法政大学キャリアデザイン学研究倫理委員会」の審査と承認を得ている (2024 年 5 月 28 日承認、承認番号 2024-003)。調査対象者に、調査目的やデータの取り扱いなどを、文書と口頭で説明した。調査協力の同意を得て、同意書に署名を頂いた。調査結果は個人が特定されないように匿名化を行った。また、本報告に関連して開示すべき利益相反(COI)はない。

4. 研究結果

関係性構築は 4 段階に区分された。1 期〈とにかく始める〉は障害が他人事であること

から抜けきれないが、わかろうとする、そして戸惑いながら養育を始める。2期〈わが子の障害を知りたい〉は子どもが成長することを知らず、知識では消化できないわからないジレンマがあり、時に感情が爆発する。しかし、毎日の養育療育と仕事に奔走する。3期〈子どもを受け入れる〉は子どもの人格や個性を認め、一人の個人として生きていることを知る。父親は養育療育経験から自身の具体的な行動変化を自覚している。4期〈対等な関係に発達〉は父親と子どもは互いに支えあい、尊重し、子どもの意思を支援する関係になる。父親も子どもも自立を目指す過程であるが、その関係が生涯にわたる覚悟と備えをする。2期と3期のあいだ過渡期として〈トランジション〉が見られ、それは語りから父親の体調不良、働き方改革による制度変更、コロナ禍対応での在宅勤務などが、きっかけであった。

5. 考察

関係性構築の4段階は「父親の障害特性のある子どもとの障害受容」と考えた。それは数年スパンで変化して、直線的な段階のようであるが、父子の関わり合いの中で育まれる。生活場面で3期・4期から1期・2期に、より戻し経験を蓄積しながら、進んでいるものと考えられる。

障害受容は上田（1980）の概念があり、広く認知され定着している。それは「障害の受容とはあきらめでも居直りでもなく、障害の対する価値観（感）の転換であり、障害をもつことが自己の全体としての人間的価値を低下させるものではないことの認識と体得を通じて、恥の意識や劣等感を克服し、積極的な生活態度に転ずることである」で5段階が提示されている。これによる本研究の父親の障害受容は説明しにくい。北原（1995）は、発達障害児をもった親の受容を「親の障害児の受容とは、障害をもった子供を、自分の子どもとしてあるがままに受け入れ、育児を楽しみながら、障害に応じて適切に育てることを受け入れることである」としている。親の立場に立った示唆に富む指摘である。しかし、父親よりも母親を対象としている側面がある。本研究は、子どもが青年期後期までの長期間を対象とした。

トランジション対応が関係性構築の変換点と考えられる。環境変化によって子どもと過ごす時間が圧倒的に増えることを機会と捉え、「父親は子どもの障害を通して関わる」から「父親は子どもを人として関わる」へと質的転換がみられた。このトランジションは子どもの成長との関係も示唆された。年齢では13歳から15歳である。発達障害児の成長段階との関係性が今後の研究課題になると考えた。

引用文献

- 上田敏, 1980, 「障害の受容—その本質と諸段階について」『総合リハビリテーション』8(7):515-21.
- 北原信, 1995, 「発達障害児家族の障害受容」『総合リハビリテーション』23(8):657-663.